一　般　研　究

問題児の生活指導

（第　二　報）

本校では昨年度，総合部門“基礎教育の研究”の一環として問題児の生活指導をとりあげたが，ひきつづき本年度もその研究と実践を進めてきた。これに関し個人指導のための運営組織と基礎調査については，本紀要第4集に掲載したので，今回は実際の指導例を中心として考察を加えたいと思う。

なお研究は中学校と高等学校の双方に対して行われているが，ここでは第一報につづき高等学校に関するものをまとめて報告することにした。

1. はじめに

昨年度は，一般校務分掌とは別個に設けられた事例研究協議会が中核となり，この問題の研究・実践に当ってきたが，本年はその経験から生徒指導の体制を一部改め，生徒指導全般を担当してきた指導部の仕事を二分し，集団指導を中心とする生徒部と，個人指導を中心とする指導部とを設置した。

生徒部は各学年を掌握するために学級担任とは別におかれた中・高六名の学年担任によって構成され，とかく遊離し勝ちであった学級と直結しながら，ホームルーム，生徒会，クラブ活動などの指導にあたり，さらに学年別会議や生徒指導のための研究会議を通し，より一層効果的な指導の方法と体制を作りだしていこうと努めてきた。

また指導部は進学就職の進路指導，個人指導のための調査とケースワークなどを担当し，本年は特に従前の資料の整理，新しい資料の蒐集，調査の組織化に努力してきた。調査としては知能検査・学力検査・クレペリン作業検査・悩みの調査・ＳＣＴ・ＩＮＶなどを行い，さらにＴＡＴやロールシャッハのようなより深層にまで迫っていく検査を試みようとして準備を進めている。

〔注〕本年度使用したテストは次の通りである。

(1) 後藤岡本式高等学校用団体知能検査（金子書房）
(2) 教研式全国標準高校学力テスト（応用教育研究所）
(3) クレペリン内田精神作業検査（金子書房）
(4) 悩みの調査（正木正・続有恒篇，教育心理学実習「調査研究」同学社）
(5) ＳＣＴ（精研式文章完成法テスト）
（佐野勝男・槙田仁著，精神医学研究所）
(6) ＩＮＶ（パーソナリティ・インベントリィ）
（佐野・槙田・坂部著，精神医学研究所）

注：P.10（保護者のために）参照

2. 我々の基本的な態度

これらの実践研究をすすめるにあたっては，我々の話し合いだけでなく，教育学部心理教室や医学部精神医学科とも連絡をとり，指導と助言をいただきながら，数回の研究会をもってきたが，それらの話し合いのなかからうち出されてきた基本方針は次のようなものであった。

1）科学的理論的裏付けが必要なのはいうまでもないが，同時に実践に当って我々が直観的に処理してきたものの集積をできるだけ大切にし，それを法則化していきたい。たんに研究のための研究に終ることなくあくまでも日々の教育実践の場で問題をとらえ，解決への努力をしたい。

2）個人指導の主眼は，各人の性格というものを何にもまして尊重し，その可能性を最大限に発現することにある。集団として生徒を扱っている現在の学校教育では，ややもすると個性が埋没し見失われ勝ちであるが，我々はこの点に注意を向け，集団と個人との間の橋渡しの努力をしてみたい。

3）そのため，多くの生徒を対象とする我々としては，毎日毎日現実におこってくる事態を処理していくおおまかな指導のめやすを，一応仮説としてではあるがつくっておきたい。今迄生徒のさまざまな行動をみていると，そこにはいくつかの型があるようにみえるし，それを効果的に指導するための方法にもいくつかの型が見出されるのではないかというのが我々の考えである。勿論型を固定化してとらえるならば，それは個性を見失うことになるが，個性理解の一つのよりどころとして概括することは，実際の指導の経験とテスト結果からみて可能であり，実践的にも有意義なのではなかろうか。

つぎに，そのような概括的仮説を導きだしたすじみちを，本年度の実際のケースについてのべることにする。

3. 本年度における指導の実際

まず年度始めの学年会議で，今後特別な個人指導を要すると思われる生徒を選ぶとともに，前に記した六種類の基礎調査を行って，まだ表面化していない問題生徒をさがしだした。つぎにこうして抽出された者をまとめ資料を印刷した上で全教官が話し合う機会をもち，皆で指導に当たれる態勢を整える一方，個人指導票を作成しこれに諸テストの結果を添えて，各教官の観察指導の経過を交換するとともに，綜合的理解に基づく適切な診断指導が行われるように努めた。

以下こうした体制で指導してきたいくつかの例をあげ，その間いろいろな問題にぶつかりながら我々が試みた若干の考察を述べてみたいと思う。

事例 1（高3男）何かにつけて粗暴な面が強く，爆発的衝動的行動が目立ち，気が向くとサッカーに熱中する反面，校具の破壊などで注意されることが多かった。クレペリン検査でも，作業曲線がジグザグに上昇し興奮的傾向を示すし，かみの毛が赤いのをひそかに苦にしていることなどもからみ，異常な行動に走ると思われ，指導を加えてきたが殆んど効果をみなかった。たまたま本年度始め机を二階から投下破壊したうえ虚偽の申し立てをし，ある教官から激しく叱責されたことがあり，その後担任が呼んで話をしたところ意外な程素直に非を認め，以後担任にも進んで話をするようになりやや落着いて現在に至っている。それまで彼の性格の激しさを考え静かな話し合いによる指導を試みて成功せず，かえって頭ごなしに叱られたのが後の担任の指導とあいまって予期せぬ効果をもたらしたと思われる。

表　1

事例	IQ	クレペリン	INV	なやみの調査 自己	神経	性的	友人	家庭	学校	向性指数
1	130	aP	Zen	0	1	1	0	0	0	140
2	108	aP	Z							112
3	148	auF	ZHs	0	0	1	1	1	2	140
4	112	a″	z	0	2	0	0	0	1	100
5	108	b″	SN	5	4	1	0	5	3	
6	128	aF	S							60
7	120	auP	SENh	8	8	9	5	7	4	
8	102	aF	HN	2	10	9	3	3	4	80
9	138	aF	Hs	0	0	0	2	1	1	92
10	128	au′	m	0	0	0	0	0	0	115
11	118	bP	m	0	0	0	0	0	1	188

事例 2（高3男）反社会的反学校的行動が目立ち，授業のエスケープを注意されても「自分の判断で自由に行動して何が悪い。叱って先生は自己満足しているのだ」という。こうした態度は3年生になり目立ってきたのだが，2年生のときのクレペリン検査で，毎分の作業量にひどいむらがあり，動揺が異状に激しく注目されてきた。しかし教師が接触しようとしても「余計な心配をせずにほっておいてほしい」という態度を露骨に見せ，両者に共通の理解がないままに今日に至ったもので，ある程度予測をしながら指導が奏効しなかった例である。

この二つを比較すると，事例1で嘘が通用しなかったということが一つの壁になり反省の機会となったのに反し，事例2では虚勢にしろ強く自己を守って破綻を感じていないところに問題があり，こうした場合の指導のむつかしさが痛感される。

事例 3（高1女）ＩＱ高く，学科も好き嫌いは激しいが成績は良い。しかし服装態度が非常にはでで，男生徒との交友が問題になったのもしばしばで，ある上級生の母親を直接訪ね交際を認めてくれと訴えるようなこともあった。悩みの調査で「親しい男の人が忘れられない」というのを第一にあげながら「それは彼の大学進学のため“からたち日記”という歌をあなたは御存知でしょう」と書いたりし何か真剣さが感じられない。これはＳＣＴの「もしも私がアメリカの家庭の子供だったらもっと青春をエンジョイできるのにと残念でならないんです」という言葉にもあらわれており真摯に自分の問題と対決しているとは思われない。そこで，文学を志すという彼女の将来のことから話しあい，自分を甘やかし現実から逃避するような態度では文学はできないこと，作者の真面目さを学びとる態度で読書をすることを注意した。このことは自信が強いだけに相当身にしみたらしく，今後の態度を改めさすきっかけになることを期待している。

事例 4（高3女）家庭科・体育など興味のない科目は徹底して欠課し，理科の答案を白紙で出すことも一度ならずあり，女子の一方の頭株であるため他への影響も強く困っていた。母が国文学を専攻した関係もあり本をよく読んでいるので，この面から指導を加えようとしたが話し合いをつとめて避けようとする。止むを得ず「君の行動をはたから拘束はしないから自分で責任を持つべきで，集団生活をしている以上決められた規則は守らなければならない。自由意志で欠課するというのならそれもまた止むを得ないが正式に届を出しなさい」と非常に形式的な注意を与え約束させたところ，その後これを守り進路の問題なども担任と相談するようになり漸々に欠課も少なくなって来ている。

以上の四つは行動が目立ち表面にあらわれる問題児で，こうしたいくつかの例で気付くのはＩＮＶのＺの要素――即ち行動性，社交性不注意などの特長であらわされる循環性性格の強いものが多いことである。興味深いのはＩＮＶでＺが強いものをみると，こうした問題生徒がいる一方，クラスや生徒会のリーダー格が多いことである。事実このグループに昨年度非常に活躍した生徒会長が入っているが，高三になってからは下級生にまかせて全く手を引き，ホームルームで生徒会の議題がでても，こうした討議に時間を掛けるのは無駄だというような破壊的発言をしその変り方に驚かされた。在任中生徒会が思い通りにならなかったこと，受験を目前にしてのあせりなどでＺの良い面からずれてきたと思われ，循環性性格の特長をよくあらわしている。こうした型の生徒はそのよい方向を認めながら問題行動に対しては意図的・指示的な積極的指導を加えた方がよいらしく，場合によっては当人の責任においてはっきりした自由の範囲を設定してやることも必要であろう。そして話し合いに積極的に乗ってくる場合が少いのは，本人の中に分裂が少くそれを意識していないためと思われる。

つぎの例は上と全く対称的な表面にあらわれない内面的問題生徒である。これは多勢の中でとかく見過され易いが，ある意味では一層の危険をはらんでいると思われる。

事例 5（高３女）目立たぬながらも安定感のある生徒であったが，悩みの調査に「ひどくつかれる。そのためしたくとも，あらゆることができない。いつもゆううつである」と書き，沈み込んでいることが多くなった。呼んで話を聞くと日頃に似合わず積極的に話をし，父が姉と事々に比較しつらく当ることなど，家への不満を強く訴えた。その後数回の面接で担任と打ちとけ，こうして話し合うことによって気が軽くなり，問題が整理されていくらしく，次第に明朗さを取り戻し看護婦学校志望という将来の目標を立てるまでに至った。

事例 6（高３女）高校入学後間もなく，登校すれば元気にやるが，朝になると気が重く出かけるのがいやになるというようなことが続き欠席が多くなった。担任としては外部からの新入生でもあり，友人の面に留意する一方，成績を気にしているようすも見られたので自信を与えるよう努めてきたが効果がなく，学部の精神医学専門の方に診断を願い，神経症とのことで一年間休学をした。復学後しばらく同じような状態が続いたが，授業の質問などを通し次第に担任と話し合う機会が多くなり，家を尋ね深夜まで話し込むようになった。そしてはたで聞いている家族が，よくあんな深刻な問題を考え続けられるものだと感心する程，殆んど一人でしゃべり続け，それを親身に聞いてくれることに満足し安心を得ていく様子であった。こうして次第に自分に自信を持ってきたらしく，出席もよくなりホームルームでも自分の体験を語ったりするまでになってきた。

以上の二つは，どちらも典型的な内面的問題生徒であり，こうした例にＩＮＶのＳの要素――即ち孤独性・思考性・非社交性などを特長とする分裂性性格が強くでていることに注意をひかれる。これらの生徒への指導としては，指導者の立場を強く出す仕方ではなく全面的に生徒に主体性を持たせた話し合い，謂ゆる非指示的 non-directive なしかたで語らせることが効果を示すようである。これは自分の中に漠然と感じている分裂が話すことによって次第に明瞭化し統一を保ってくるためではないかと思われる。

これらと同じ系列に属すると思われ，諸検査に極端な結果がで注目をひいている例を次につけ加えてみたい。

事例 7（高１女）成績も平均してよく，始めは特別に注意するような事実もなかったが，ＩＮＶではＳが極端に強く出，クレペリレ検査も auP で作業量は多いがひどい行には誤りが半数以上あり，それが連続的にあらわれ，また悩みの調査につけた○の数も今回の調査でもっとも多かった。こうして注意をひかれていた矢先き，夏休みに母親から連絡があり，本人が家人と殆んど口もきかず極度のノイローゼ状態にあり，特に父親との間がまづく興奮すると「死んでしまえ」と口走り自らも服毒しそうな危険が感じられ，爆弾をかかえているようだと困惑を訴えた。ＳＣＴにも「私が知りたいと思うことは外国の地のこと，私はもうこの名古屋・日本にいたくないから」「私を苦しめるのは経済的に恵まれていないということ。友人・近所の人が白眼視すること」と記している。これから考えると経済的問題が大きく関係しているらしく，入学時につくった制服代の支払が遅れているということもあり，これが父親への不満にもつながると思われ，加えて浪人をし一年おくれて入学したこと，自分と正反対に如才なく父とおりあう姉の存在などの外的条件が，諸検査にあらわれる本人の性格的なものとからみあい，こうした事態になったと思われる。これに対する指導の方針としてはアルバイトやＰＴＡ会費免除等の経済的面に考慮を払う一方，悩みの調査で学校友人関係に○印が少なく，夏休みが終るとやや平静に戻ったことに注目しまず学校生活に開放と安息の場を見出すようにしむけ

ることにした。さいわい同じクラスの病気休学で一年後れた生徒と話が合うようなので，その面から対人関係の緊張をとくようにし，あわせて事例5，6のように教官と話し合える状態にもっていくように努めた。こうして以前は避ける一方だった教官室へも質問にくるようになり，アルバイトも始め次第に好転していくようにおもわれる。

4. 事例からの考察

1) 類型化の一つの試み

前項では七つの事例を通じて，二つの大きな問題生徒の方向を考えてみたが，このように多くの生徒を個人的に見ていくと幾つかの型に分けることができるように思われる。しかしこうした類型化は個人を固定化して見てしまう危険もはらむわけで，我々の話し合いでも，この点について，生徒を全人的力動的に理解しなければならないという反省が出された。しかし一方多勢の生徒を扱う教師の立場としては全員に個人検査をする余裕もなく，類型的見通しが便宜的に必要とされることも事実である。そこでこの限界を充分理解した上で，個人の力動的理解へ進む一つのよりどころとして類型というものを考えてみるのも，我々にとって無意味ではないと思われる。

具体的に考えたのは，図1に示すようにできるだけ単純化したもので，縦軸に行動の方向をとり，外へ向うものと内へ向うものに分け，横軸には反応の速度をとって遅・速に分け，皆で話し合い個人にそれぞれの位置を与てみた。しかしこれは多分に思いつき的なものがあり，一面的な分類になっていることを心配していたが，後に図2に示す横田象一郎氏の性格診断表を

図　1

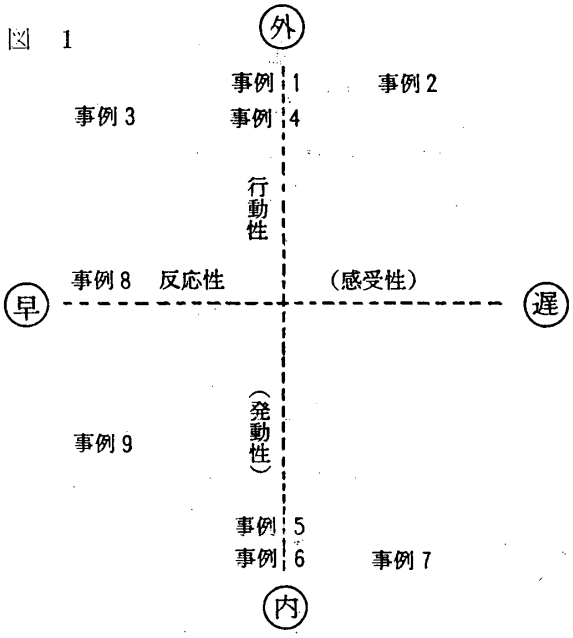
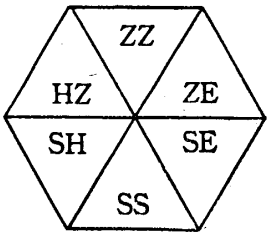


図　2



横田氏の性格類型
（「クレペリン精神作業検査」解説所載）

見，この立場から我々の図を検討する機会を得た。日常の観察をもとにして，我々の図にあてはめた生徒についてＩＮＶを調べてみると，㊀にはＺ，㊁にはＳ，㊂にはＨ（ヒステリー性性格），㊃にはＥ（てんかん性性格）が強くでているものが多く，横田氏の表に対応する点が多いように考えられるので，やや自信を得るとともに，教師の観察にＩＮＶを加味し参考にしながら位置づけをすることにした。

縦軸については前項で述べたとおり，両端に外的問題生徒と内的問題生徒が多くみられ，指導も相当違ったものが要求されるようである。逆に横軸の方向にはこうした問題生徒が少なく，㊂には次の二例のように多少とも自己中心的で依存性の強いものが多いが，教師が相談に乗ってやったり，友人面に注意をすることで問題解決のきっかけを得ることが多い。

事例 8（高1女）親一人子一人で母がきびしく，成績の不振と友人がないのを苦にしている。ＳＣＴで，「どうしても私は一人でいると寂しくてなりません。しょうらいのこと，友達のことなどを考えると自然に涙がでてきてしかたがありません」「家ではよくよその人とお茶をのみながら話をします。その時私は非常な幸福感を感じます」といい，悩みの調査にも相談したい人として「気にやんでいることを話したい。自分の心をよく理解し，体験を話しながら悩みを解いてくれる人で，同級生でなくむしろ年上の人がいい」と書いている。

事例 9（高1男）一見しっかりしているようにみえるが，気が弱く友人が少いことを悩んでいる。やはり話したい人として「お母さんのように自分を大切にしてくれる人，時にはしっかり時には甘えさせてくれるような常に自分を理解してくれる人。（自分と同じくらいの女性）」と書いている。

この二例は運動クラブに入って，スポーツを通じ友人もでき，こうした悩みは次第に解消しているようである。

また㊃の方向には殆んど問題生徒を見出すことがで

きず，多少の気むずかしさはあっても，与えられた仕事を独力でこつこつやりとげる，目立たないが粘り強さのある者が多い。こうしたＩＮＶのＥであらわされる性格がむしろ問題行動を抑制する因子として働いているのではなかろうか。

この図式にまとめられた我々の考え方は，ずさんで未完成な仮説ではあるが，以上述べたように生徒をとらえる第一歩として指導法とむすびつけ，今後進展させていきたいと思っている。

2） 調査の系列について

日常の接触を通して生徒理解を深めていくことが大切であるのはいうまでもないが，これを裏付ける客観的資料を缺くと，その理解は一方的独断的判断に陥る危険を生ずる。そこで生活指導の一般的資料にするとともに，問題生徒の早期発見に役立てたいと考え，生徒指導に必要な最少限のテストを基本的調査として選んでみた。テストを選ぶ観点として，われわれは生徒のパーソナリティを実際的観点から能力的相面（知能・精神的分化・見通しなど），情意的相面（気質性格など情意的側面のうち比較的固定的なもの），力動的相面（内的状況――劣等感・葛藤・不安など）の三つに分け表２のような系列を考えてみた。表にあげた六種類のテストはすべて団体検査が可能なので全生徒を対象として行い，更にそこで発見された問題生徒について必要に応じロールシャッハ・テスト，ＴＡＴ（絵画統覚検査）などの個人検査を利用することにした。

表　2

観察	諸テスト		
	能力的面	全般的に	情意的・力動的面
面調	知能テスト	標準学力テスト	INV―気質的なもの(SZHE) バランス(N)
接査		文章←完→成法	クレペリン―意志，発動力，エネルギー 悩みの調査―個体的，環境的決定要因 (Ror. TAT―問題の力動的構造)

これだけの種類を行うことは時間的労力的に相当な負担であるのは事実だが，一つのテストですべての相面を完全にとらえることは不可能なので，やはりこれだけのものを併用していくべきだと考える。

たとえば，同じ情意的相面をねらうにしてもＩＮＶ・ＳＣＴ・悩みの調査では直接的なしかたで問題を提示しているが，クレペリン検査では作業を通して間接的にそれをとらえようとしている。つぎにあげる二つの例は直接的に問うと意識して答を避けるものであるが，こうした場合作業検査が大きなよりどころと役立つことが多い。

事例10（高１男）相当に進んだ神経症で二年間入院治療しこの九月に復学した生徒である。このためかこうしたテスト類には極度に神経を使うらしく，悩みの調査には全く○印をつけず，ＳＣＴも一人残って二時間費しながら「私がくやしかったのは去年西沢選手が引退したこと」「私を苦しめるのは別にない」程度のことしか書いていない。しかしクレペリン検査は au′ で正常曲線に近く誤謬もみられず，殆んど心配するような結果を見いだすことはできなかった。

事例11（高１男）前例とは逆にＳＣＴを真先に提出し「うれしかったとき私はよろこぶだろう」「私が好きなのは軽音楽と恋人」といったような調子で質問をはぐらかしており，ＩＮＶや悩みの調査も殆んど白紙で出している。しかしクレペリン検査の結果はｂＰで作業量は本校で最低，休憩効果・初頭努力ともになく後半になるに従い著しく誤りが増加し動揺もはげしくなっている。

最近の様子をみると，事例10の生徒は落ち着きがでて運動クラブにも加入，積極的に活動し経過良好とみられるが，事例11は成績が悪化し注意力散慢で関心が外へそれ心配な状態がみられている。クレペリン検査は後の処理が面倒であるが，その利用価値に随分大きなものがあり，このように手数はかかってもいくつかの面から調査を試みることは実際に役立つ場合が多いようである。

本年度はこれらのテストを適宜実施してきたが，今後は実施の時期順序などを研究し年間系列として時間的配列を考えていくつもりである。

5. 今後の課題

われわれはこの一年新しい個人指導の体制の下で仕事をしてきたが，その間新しくいろいろな問題にぶつかり今後に多くの課題を残してきた。つぎにこれらを個条書きにしてむすびに代えたいと思う。

1） 本年度は調査の主体が集団検査となり，個人検査を充分実施することが技術的また時間的にできなかったが，今後はロールシャッハ・テストやＴＡＴにも習熟し問題生徒の診断と治療に活用していきたい。

2） 指導部の仕事の面では，本年は資料の提供などを通して担任の個人指導を援助していくという形が多かったが，今後は相談のための窓口を開くなどもっと積極的に動いていきたい。

3） われわれは問題生徒を主に個人指導の面から扱

ってきたが，こうした立場だけでは完全な結果を期待できないのではないだろうか。その生徒がおかれている仲間・学校・家庭など社会的集団の場に注目し，グループ内の相互的作用による向上ということをあわせ考えていくのを忘れてはならない。

4）こうした方向に進みながら，一層多くの事例を積み重ね，追跡的に指導観察を継続し，この研究を発展させていきたいと考えている。